

『患者さんに顔のみえる病理医からのメッセージ～あなたの「がん」の治し方は病理診断が決める！～』

(堤 寛 著)



- A5判, 186頁
- 定価 1,600円
- 三恵社

2012年暮れに、「顔の見える病理医」堤 寛教授の新作が出版された。藤田保健衛生大学病理学講座の教授として多忙な日々を送る堤氏が、数多くの病理学専門書だけでなく、医学生や看護学生向けの教科書、さらに一般向けの書籍までを執筆する時間をどうやって捻出されているのかは、いまだにナゾである。

本書の全体から伝わってくるのは、標本の向こうに一人ひとりの人生や毎日の暮らしを想像しながら顕微鏡に向かう誠実な病理医の姿である。医療行為における病理診断の位置づけや病理医の働き方を、これほどわかりやすい語り口で解説した書籍があったらどうか、医学生や臨床医にアピールする内容であることはもちろんだが、さらに病理診断をよく理解し、納得して治療に臨みたいと考える患者本人や家族にとって、まさに福音となる書籍と言える。

本書は7章からなっている。1章「病理診断」では、がん治療のなかでの病理診断の位置づけや標本作成も含めた病理診断の手順が語られ、2章「がん細胞」では、がん細胞の病理学的な特徴や、「正常」が「異常」との比較の上で成り立つ相対的な概念であることが示される。病理学を学びはじめた医学生にも読んでほしい内容である(実習でひたすらスケッチする標本がどのようにできあがるかを知ってほしい!)。3章

「病理診断報告書」では2種の報告書が提示され、その読み方が解説される。その2種とは、良性悪性が判定できず再検査が示唆された胃生検と乳がん手術材料の病理診断なのだが、その具体的な説明を読むと、病理診断が提供する情報量の多さと、病理所見が治療方針の検討においていかに決定的な意味をもつかが改めて実感される。4章「病理医」では、病理医が患者の顔を見る(=患者に直接病理結果を説明する)ことによって治療に向き合う本人の納得感が増し、不安が軽減する可能性が示される。病理医と患者が出会う場所としては、病理診断科の“病理外来”や“セカンドオピニオン外来”がありえるが、その機会はまだ限定的である現実をふまえ、5章「患者さんとの交流」では病院システム外で患者から直接病理のセカンドオピニオンを含めた相談依頼を受ける堤氏の無償の活動が紹介される。ここでは、氏の説明に納得して前向きに受容していく患者の姿を見るということが自分にとっての“体験学習”であるという言葉が印象的である。6章「病理標本は語る」では、同じ標本の病理診断の意見が割れる例や臨床情報の不足が病理診断に及ぼす影響が語られる。病理医と臨床医の話し合い(連携プレイ)によって誤診や誤解が防げると強調する堤氏は、臨床医との電話連絡を重視するという。それだけでなく、病理診断書を読んだ臨床医の理解不足が不適切な治療につながらぬよう、わかりやすい診断書を書くように若手病理医を指導しているという。病理標本から最大限の情報を引出し、それを適切な治療に結びつけるためには、病理医と臨床医双方の歩み寄りが欠かせないことを示している。7章「病理医と社会」では、病理検体の所有権や廃棄にまつわる倫理的問題、院内感染防止における病理医の役割など、診断業務を超えた病理医と社会のつながりが論じられる。本文のあちこちに、患者さんとの交流をつづったコラムも挿入されている。

多岐にわたるトピックをとりあげられているにもかかわらず、内容がスッと入ってくるのが不思議である。堤氏の声が聞こえてくるようだ。病理医が身近になり、一枚の病理診断書への向き合い方が変わりそうな予感がする一冊である。

(国立がん研究センター がん対策情報センター
がんサバイバーシップ支援研究部、
高橋 都/たかはしみやこ)